
 一 般 演 説

1. Urethan 誘導体の泌尿器外科的応用 (基礎的研究) : 杉村克治, 西村吉蔵 (奈良医大) 最近我々は, Urethan 誘導体を腎血流阻血時に用い, 且臨床例にも好成绩をおさめているが, 今回は Urethan 誘導体 Decyl urethan を用い, 90分腎血行遮断家兎による創傷治癒への影響に就いての組織学的観察を報告した。

2. 各種薬剤に対する *Trichomonas vaginalis* の感受性と Flagyl の治療成績 : 山本 弘, 石原藤太郎, 大島 升, 北村孝雄 (大阪通信)] 18種の薬剤に対する *T. vaginalis* の感受性実験を行い, Flagyl に対し最高の感受性を示すことを知った。即ち, その試験管内最小発育阻止濃度は 1.0-2.0 μ g であり, 以下 Trichomycin (4.0-8.0u.), Aminitrozole (1.0-10 μ g), Mapharsen (2.0-10 μ g), 青酸々化汞(10-100 μ g) の順である。

Ⅱ. 男子非淋菌性トリコモナス尿道炎 7・女子尿道膀胱炎 (尿及び陰分泌液中 *T. vaginalis* 陽性) 13, 計20例に対し Flagyl 経口投与療法を行った。即ち, Flagyl 250mg 錠を朝夕1錠宛, 1日2回, 10日間連続, 総量5gに及ぶ。治療完了直後の成功率は100%を示した。20例中11例は治療後2.5乃至3月を経過し, 之等遠隔成績も亦100%治療率を示した。副作用は軽微であつて, 20例中9例のみ治療中胃部不快感を訴えた。

追加 : 前川正信 (阪大) 8823RP. を使用し有効であつた1例を追加した。20才・女子, 未婚, 感染機会不明。約3週来・頻尿, 排尿痛並びに陰分泌物の増加を自覚し, 種々の抗生物質の投与を受けたが治癒しないので来院した。投与方法は, 第1日1錠, 2日以後は朝夕1錠宛計2錠を9日間, 計10日間経口投与する方式により, 陰錠は併用しなかつた。*Trichomonas* は服用3日間で検鏡上(-)となり, 10日間で全く治癒した。副作用としては, 服用3日目よりかなり強い頭痛, 悪心, 嘔気及び腹痛を訴えたが, 服用を中止する程ではなかつた。

本剤は, 多少の副作用を認めるが, 効果の確実な *Trichomoniasis* 治療剤である。

3. 尿路感染症における TERRAVENOUS (テラマイシン静注液) の応用 : 原 信二, 古玉 宏 (大阪医大) テトラサイクリン系の広範菌抗生物質とて,

そのまま注射することの出来る製剤である TERRAVENOUS を尿路感染症19例に使用し, 有効9例, 無効3例の優秀なる成績を得た。TERRAVENOUS 250mg 静注時の血中濃度は15分にて最高濃度に達し (15.6mcg/ml), 漸次下降し静菌作用は12時間持続させた。

4. *Klebsiella* 属菌による尿路感染症について : 福井一郎, 谷村実一 (大阪医大) 本学教室に於ける尿路感染症を起因菌別分類し *Klebsiella pneumoniae* を検出す 昨年度4例, 本年8月5日迄に5例を数え, うち起因と考えたのも5例, 菌交代現象と考えたもの4例を認めた。主訴, 病歴, 尿沈査等を検討し相共通する点を認める。自覚的症狀なく特発的血膿尿, 更に尿沈査に於いては多数の赤血球を認める。本菌を家兎耳静脈内に注射し, 腎, 肝, 肺, 副腎, 膀胱, 睾丸等に出血巣を主とする変化を認めた。検出菌の感受性検査に於いては KM に感受性を示したほかいづれにも耐性を認めた。

追加 : 前川正信 (阪大) *Klebsiella* 属菌は一般に呼吸器感染の際認められると考えられているが, *Bergey's manual* には呼吸器のみならず腸管及び尿管性器にも感染を惹起するとの記載がある。然し乍ら臨床例から *Klebsiella* を分離することは珍らしい。最近, 17才の女子の結核性萎縮膀胱に対して尿管, 腸, 膀胱吻合術 (Cat tail type) を行い術後10日以後のカテーテル尿中に再度本菌を見出した。本例に於ける尿中細菌巢の消長は菌交代現象を思ふものがあつたが, 術後経過は極めて順調で腎盂炎の発生もなく, 治癒退院したものである。分離菌株についての詳細な細菌学的検査は行つていないが, 吾々の例では臨床経過よりみて必ずしも病原菌として存在したものは云い難いと考へている。

5. 腎性高血圧の実験的研究 : 青木敏郎 (神戸医大)

家兎38羽を用い Goldblatt 阻血腎を形成せしめ, 第Ⅰ群14羽には左腎動脈狭窄を, 第Ⅱ群24羽には左腎動脈狭窄及び同時に腎別を施行した。第Ⅰ群では, 血圧上昇は14例中僅か4例のみに認めその中2例には腎硬化像が見られた。第Ⅱ群では24例中19例に血圧上昇を認めその中8例に壊死を認めた。総じて血圧上昇例は壊死性変化が強く, 暗調細胞及び Juxtaglomerular cell 等昇圧機序に関係せると思ふ之等の細胞の変化

は、必ずしも血圧上昇と一定の相関関係を認めず、又高度血圧上昇例にも病理組織学的に何等の所見も認められず、概して血圧上昇には壊死が何等かの昇圧機序を果すのではないかと想定しえた。

6. 急性腎不全の治療（人工腎による血液透析）：
 稲田 務，仁平寛巳，西沢謙次，久世益治，相馬陸臣（京大）急性腎不全の無尿期の治療として、Kolff's disposable coil kidney による血液透析について報告した。症例は腎毒性物質による無尿3例，妊娠中毒症1例，小児急性腎炎1例，肝腎症候群1例，異型輸血1例の計7例で10回の透析を行つた。生命を救い得たのは7例中3例であるが，10回の透析は無尿期に於ける体内諸平衡異常の改善に効果的であつた。即ち術前95～229（平均164.8）mg/dl の血清 NPN は透析2時間で平均42，4時間で平均76.3，6時間では約120mg/dl 減少して，46～62g の窒素を除去し得た。また術前低 Na 及び低 Cl 血症，高K血症を示した血清電解質の異常も，透析によつて正常値の範囲内には是正し得た。

7. 各種抗菌性物質の管腔内性造影剤との混合に関する研究：石神襄次，森 昭，原 信二（大阪医大）
 尿路の管腔内への造影剤注入によつて不測の2次感染の発生若しくは局所病変の再燃を来す例は少なくないそこで我々は管腔内性X線撮影時に於ける感染防止，併せて局所療法を行う意味で各種抗菌性物質を造影剤に混入し次の如き好結果を得た。各種抗菌性物質の造影剤に対する最大溶解量は PC 150mg/cc, SM 150mg/cc, TC, EM, KM 各 10mg/cc, スルファイソメゾールナトリウム 250mg/cc を示し，造影剤添加による抗菌力の減退は軽度であつた。又同造影剤を尿路疾患81例に使用し，X線診断的価値の減退を認めず。71例の R.P. に於ては2次感染率は7.0%を示したに過ぎず，又治療として血清液症6例に使用し，その4例に著効を認めた。

質問：後藤 薫（岐阜医大）副作用はなきや

答：原 信二（大阪医大）抗菌性物質添加による造影剤注入後腎部疼痛を5例に認めたが，造影剤単独注入による場合に比して多いとは思われなかつた。

8. レノグラムに依る腎機能の検討：瀬川昭夫，鳥井 肇，佐分 光雄（名大）鳥津式レノグラム装置にて Hippuran-I¹³¹ を体重 1kg 当り 0.4μc を静注し，立位及び臥位に於ける腎機能を比較検討した。正常腎では臥位でB点の延長を認めたが，排泄時間に著明な変動を認めなかつた。遊走腎はその程度により排泄の遅延を認め，一般に臥位では排泄時間の延長を認める例が多い。立位排泄性腎盂撮影に於ける腎の位置

と，軽度前屈坐位に於ける腎の位置には可成りの差を認め，腎はレントゲン写真以上に極度に下降を示す。腎固定術施行後の腎機能は，立，臥位共に約3週間で正常となる。その他体重との関係，尿中排泄量，大量の水分摂取による変動，腎剔除後の変動等を比較検討した。

9. 経静脈性腎動脈撮影について：田中 晋，深町弘光（長崎大），常岡 彰（長崎大放射線科）従来行なわれて来た経腰的，又逆行性腎動脈撮影に変わつて，これらの方法よりも容易に行えて且安全な経静脈性腎動脈撮影を行つている。高濃度の造影剤を外頸静脈から急速に注入し，予め Saccharin 法によつて決めた循環時間によつて 1～1.5秒間隔で撮影する方法で，現在迄数例の腎疾患に本法を施行したが腎動脈の分岐状態は可成り鮮明で，腎疾患の診断の一方法として推奨できるものである。

10. 白昼迅速レ線現像法の泌尿器科領域への応用：前川正信（阪大）デンタルX線迅速現像法の研究から出発した藤木の白昼迅速現像法は，一般外科領域にも広く応用し得る可能性がある。本法は暗室を必要としないために，いついかなる場所に於いても現像が可能で，しかも3分間前後の短時間で明瞭なレ線像を得ることが出来るものである。この点，泌尿器科領域では手術台上のレ線撮影に最も適している。吾々は，腎結石10例（17枚）並びに腎結核1例（1枚）計11例に本法を施行して，従来の現像法と比較し，本法の優秀なことを確かめたので吾々の施行している本法の実際とそのレ線像を供覧した。詳細は泌尿紀要7巻10号に譲る。

追加：児玉道正（堺市民）26才男。左腎下極の小結石症に対して腎部分別除術を施行したが，この藤木氏による白昼レ線現像法を応用した。本液は操作が簡単であり，暗室を必要とせず且つ現像時間が3分間以内である為，手術台上における操作として極めて好適である。

11. 延引性腎盂撮影法について：岡 直友，菅野英男，塚木俊雄（名市大）当教室の無圧迫排泄性腎盂撮影による delayed pyelogram につき，正常腎盂像の推移，腎機能の有無，上部尿路の排泄機能の良否，拡張上部尿路の描出，尿管結石の確認等の項目について検討し，1) 健腎の D.P. では90%が消失又は痕跡的となり，45～60分の撮影で上部尿路機能を判定出来る，2) 患腎で30分迄に像を現わさぬものは腎機能廃絶と判断しても大過ない，3) 水腎症の如き上部尿路障害は D.P. の好適応例である，4) D.P. による拡張上部尿路全長の描出の可能性は50%で，可能例は45～60分の撮影で十分目的が達せられる，5) D.P. は尿管

結石の診断に極めて有効であるとの結論を得た。臨床上屢々応用されて然るべき検査法と考えられる。

追加：前川正信（阪大） 1時間以上の延引性腎盂撮影法については最近数例の経験を有するが、ここには先天性尿管症と思われる症例に施行して得られたレ線像を手術所見と共に供覧した。4カ月の男児。腹部腫瘤と発熱のため阪大小児科に入院し、当科に検査を依頼された。膀胱炎のため逆行性腎盂レ線撮影が不能であるので本法を試みた。60%ウログラフィン20ccを静注し、2時間後の影像で右側尿管症の所見を得た。本法は、逆行性腎盂レ線撮影法が不能で排泄遅延のある場合の腎盂及び尿管の造影には施行して価値のある方法である。

質問：黒田恭一（金沢大） 排泄性腎盂撮影における延引性撮影と逆行性腎盂撮影におけるそれとの長短について如何様と考えられるか。

答：岡 直友（名市大） 上部尿路に尿停滞の推測される場合、逆行性上部尿路撮影法による延引性腎盂撮影法は常に行い停滞状況を確認している。今回の報告は、出来る丈患者に肉体的負担を与えずに行える経静性腎盂撮影法によつて、これを延引性に行うことによつて上部尿路像がどの様に把握可能であるかを研究し、用うべき点の多い事を述べたのである。

12. 新型レ線発生装置付万能内視鏡検査台の紹介：
三矢英輔，浅井 順，牧野昌彦，加治安彦（名大） 我々は透視と撮影とを同一面で施行出来る上題の如き検査台を作製し、その動作（上下左右、回転、レ線管球の上下等）は総べて電動式とした。又ボタンを押す事に依り一般レントゲン撮影、レントゲン映画撮影、レントゲンテレビの切換えを行う事により各々の長所を充分發揮出来る様にしたのでそれについて紹介した。

13. 前立腺蛋白質の電気泳動法による研究第1報：
小田完五，沖田和男，平竹康祐，井上 進（京府医大）
前立腺腫瘍を生化学的に蛋白代謝の面から検討すべく、外科的に剔出した前立腺組織（肥大症7例、癌1例）及び前立腺液（健康若年者及び肥大症患者19例）のProtein (P)及びGlycoprotein (G)を沓紙電気泳動法により測定した。組織はホモジナイズし超遠心分離した上清を、前立腺液はマッサージによつて得た分泌物をそのまま材料とした。肥大症組織のPではA1.分画が血清のそれより低く、GではA1.分画が血清のそれより、又組織のP-A1.分画より低い。液のP, Gでは組織のそれらとよく一致した型のもの10例、A1.分画が共にやや低いもの6例、A1.分画とγ-GI.分画の高いもの3例の3型に分けられたが、年齢及び特殊疾患との関連性はみとめられなかつた。

14. 前立腺癌の病理組織学的検討：友吉 唯夫（京大） 前立腺癌の悪性度の基準を確立し、初期癌とまぎらわしい状態についてはつきりした線を出す目的で134例の標本について病理組織学的な考察を行なつた。悪性度の分類として新たにC.G.S.分類を提唱した。CはCellular Atypism(細胞の異型性)、GはGlandular Pattern(腺型)、SはCondition of Stroma(間質の状態)の略であつて、夫々をI, II, IIIの3段階に分けて、例えばC III G II S IIの如く表現することにした。また所謂潜在性癌という呼称に対しては否定的な見解をとり、初期癌と紛らわしい状態を老人前立腺にはかり見受けることに注目、これを老人性前立腺腺症(Senile Adenosis of the Prostate)と命名した。詳細は泌尿紀要に発表の予定。

15. 前立腺癌及び前立腺肥大症に対するヘキサロン錠使用治験：篠田 孝，尾関信彦，伊藤鉦二，阿部貞夫（岐阜医大） 従来我が国では前立腺癌及び前立腺肥大症に対する発情ホルモン投与は専ら注射が行われて来たが、最近我々は経口発情ホルモン剤であるヘキサロン錠剤を使用して臨床経過を観察検討した。即ちヘキサロン（1錠3mg）3～6錠を1日量として連日投与した。7例の癌に於ては腫瘍の軟化縮少或は再増殖の抑制が目立ち、血清酸フォ値の低下、自覚症状の軽快等見るべき効果を得た。又6例の肥大症に対しては腺腫の縮少は認められなかつたが、残尿の減少に伴い、自覚症状の著明な改善を見た。副作用としては乳房の着色を見たほかは、特別服薬を中止せねばならぬ様なことはなかつた。

16. 尿路腫瘍の組織培養の研究（第3報 尿路粘膜及尿路腫瘍の動的観察）：細田寿郎，新海圭一，小形和太郎，佐々木 茂，岡島英五郎，長門谷洋治，近藤義雄（大阪日生） 我々は尿路腫瘍の組織培養を企図し既に膀胱粘膜及び腫瘍並びに尿管粘膜のそれぞれの上皮と結合織の組織培養を行い、その時間的経過と形態的観察の概略を報告したして来たが、今回尿路粘膜及び腫瘍の増殖過程の16mm映画撮影装置による動的観察を報告した。

17. 腎腫瘍の統計的観察：加藤篤二，道中信也（広島大） 吾々の教室において昭和30年から36年6月末までに入院加療を行つた腎腫瘍患者は19例であり、この手術的に摘出したものは15例である。内訳は腎乳頭状癌8例、Grawitz's Tumor 8例、繊維肉腫1例、Wilms' Tumor 2例である。之等の中原爆に關係あるもの4例、又剖検を行つたもの4例がある。この中特異な所見を示したもの、又その臨牀経過について報告した。

追加：菅野英男（名市大） 昭和26年より本年8月迄の10年8カ月の当教室の腎腫瘍は24例で、全外来患者の0.25%に当る。年令は40才～77才，50才代が最も多く，40才，70才代がこれに次ぐ。性別は男子17，女子7で♂♀=2.4:1，患側は右側13例，左側11例，24例中腎切除術を施行したものは15例，組織学的所見の明らかなものは11例で，うち10例は悪性腫瘍である。10例中7例は淡明細胞癌で，3例は顆粒細胞癌であつた。尚良性腫瘍の1例は孤立性嚢腫に乳頭腫と血管腫を合併した興味ある例であり，又悪性腫瘍中の2例に腎孟像上で腫瘍の所見が軽微で而も著大な腎腫瘍を認めた症例を経験している。術後の消息の明かなものは11例で，1年生存率72.7%，3年生存率62.5%，5年生存率42.8%である。

質問：岡 直友（名市大） 原爆との関係の有無。

答：道中信也（広島大） ある様思う。

質問：岡 直友（名市大） 直接関係があるといえるか。

答：道中信也（広島大） それは何とも云えない。

18. 腎盂尿管腫瘍の臨床的観察：金沢 稔，桜根孝志，三軒久義（和歌山医大） 昭和29年より36年8月迄に於ける腎盂腫瘍は7例，尿管腫瘍は6例。入院患者数に対する比率は実質性腫瘍1.2%，腎盂腫瘍0.38%，尿管腫瘍0.33%である。Papillomatosisは7例。腎盂腫瘍の4例は入院中1，術後10カ月，1年，1年6カ月生存各々1，尿管腫瘍の2例は術後1年5カ月，5年生存，その他は悉く原病，脳溢血その他で死亡している。ベンチデンにより発生したと思われる腎盂，尿管腫瘍が夫々1例，計2例あつた。ベンチデンそのものよりも寧ろFluoren, Carbazol等の癌原性を追及する必要がある。又腎盂腫瘍の内1例は腎実質にも腫瘍を認めたがその詳細は組織学的に検索中。その他一般的統計事項について述べた。

19. 巨大腎血管腫症例：田尻伸也（金沢大） 10年来の無症候性血尿を主訴とする53才の婦人に対して，腎摘除術を施行し腎血管腫なることを確認した1例を報告した。摘出標本は665g，腫瘍は右腎上半をしめ，105.×10×7cmで厚い被膜により被包されていた。組織学的には中心部は出血と壊死が著明で，辺縁部には内腔に一層の内皮細胞を有し赤血球をみたした大小の血管の増殖がみられた。被膜は硝子様に肥厚せる線維性の組織よりなり，一部石灰化を認めた。本例は本邦第10例に相当する。詳細は原著として発表する予定である。

質問：岡 直友（名市大） Angiographieを行つたか。

答：田尻伸也（金沢大） 行わなかつた。

20. 腎臓破裂の3例：山田瑞穂（鳥田市民） 最近半年間に相次いで経験した本症の3例について報告した。1) 28才男，電柱より転落して頭部及び腹部を打撲，脾破裂をも伴い脾摘除術を行つた。左腎上部の破裂であつたが機能はよく保たれていたため保存的に処置したが，反対側即ち右側に腎が発見されず，腎欠損或は極めて高度の發育不全腎と思われた。2) 30才男，廻転せる機械に衣服をまき込まれ，上半身を締めつけられた。呼吸停止を来したが，これは非開放性の気管挫滅離断（約5cm）によるためであつた。右腎が高度に損傷されていたので剔出した。右腎はほぼ中央部で横に裂け，下半はほとんど離断していた。3) 25才男，オートバイでトラックと衝突して左半身を打撲，左大腿骨折と左腎破裂を来たした。では損傷が高度とは思われなかつたが，出血甚だしく膀胱内凝血を見た程であつたので剔出した。

21. 尿管腫瘍の1例：多田 茂，今中千秋，小谷宣丸（三重医大） 患者は65才の男子で，約3カ月前より右腰痛及び1週1回程度の血尿を来した。検査所見としては青排泄右側10分迄(-)，尿管カテーテル法では右側尿管口より18cmの部位にて抵抗を感じ，その部位にてはカテーテル尿よりの出血が高度となり，その後30cm迄挿入する事が出来てカテーテル尿は清澄となつた。又腎盂尿管撮影に於ては腎盂の拡張の他に腎盂より約5cm下方に拇指頭大の陰影缺损部を認め，その境界は鋸刃状であつた。以上より右尿管腫瘍と診断し，右腎尿管全摘除術を施行した。摘出標本は乳頭状癌であつた。

22. 腎盂結石の腎盂粘膜癒着による巨大水腎症の1例：並木重吉，高橋 洋（国立金沢） 患者は腰背部鈍痛を主訴とせる68才の家婦，家族歴及び既往歴に特記すべき事なし。右腎は小兒頭大，緊満性，表面平滑に触れ，圧痛はない。静脈性腎盂撮影で，右腎盂尿管像は正常であるが，左側は30分で造影不能，第3腰椎左に3.8×1.5cmの結石像を認め，左腎摘除術を施行，摘出腎は22×14×9cm，重さ1,500g，数個の球状に膨隆した嚢状を呈し，内に潑溜尿1.3ℓを認めた。結石は腎盂尿管移行部に固着し，同部粘膜の組織像にリンパ球及び形質細胞の浸潤，石灰化，異物巨細胞，結合織の増生が認められ，結石に起因する巨大水腎症であると考えられた。

23. 尿路結石の3例：藤野文雄，柳田伍平（名交病院） 症例1) 29才，男子。左側腹部疼痛と嘔吐を主訴として来院，単純撮影上結石陰影を得ず。逆行性腎盂撮影により水腎を証明，更に上部尿管の屈曲を認め

た。手術により極めて小なる結石であつた。術後水腎の回復の模様を非圧迫性経静脈性腎盂撮影により追求、80日で正常に復した。残糸窒素、尿素窒素も之に平行した。症例2) .64才、男子、右腎、左尿管、膀胱にみられた多発性尿路結石で左腎は水腎を呈し結石の除去により6ヶ月で正常腎盂像に復した。尚 Ca と P の関係は却つて Ca の稍低下、P の軽度上昇を認め Hyperparathyroidism は一応否定した。症例3) 41才、男子、膀胱乳頭腫を伴つた巨大膀胱結石でレ線像並に摘出結石を呈示した。詳細は原著に発表の予定。

24. 腎結石と紛らしき内服錠剤の X 線像：矢野 登、来田 実、河合正之（三重医大） 36才男子、慢性腎炎の疑いで内科入院中腰痛を来したので、腎部単純撮影を行つたところ左腎部に腎結石様陰影が認められた。当科入院後泌尿器科的検査を行つたところ、腎結石様陰影は内科入院中より服用していた Hopallet（コハク酸第一鉄）であることが明らかになつた。数人の患者に内錠剤を服用させ腎部単純撮影を行つたが症例と同様の腎石様陰影を得た。鉄剤その他多数の錠剤は直接 X 線撮影を陰影を形成するところから単純撮影で上部尿路結石と紛わしいことがあるが泌尿器科的検査で容易に鑑別出来る。

追加：酒徳治三郎（京大） 京大泌尿器科における最近の尿路 X 線単純撮影フィルム12,000枚中より人為腸管内 X 線陽性異物を調査した所内服錠剤12例、義歯1例、釘1例計14例を算した。

25. 上部尿路結石を合併せる Cushing 症候群の2例：黒田恭一、津川竜三、向來義彦、浜屋 修（金沢大） 第1例：16才、男。右尿管に大豆大、2個の結石及び右副腎に血腫（重さ13g）を認めたが組織学的に異常はみられず、左副腎も試切にて正常であつた。第2例：42才、主婦。右下腎杯に小豆大の結石及び左副腎に胡桃大（重さ19g）の腫瘍を認め副腎皮質腺腫の像を呈した。なお右副腎は試切にて部分的に萎縮を認めた。なお本症例は osteoporosis による第12胸椎、肋骨、右恥骨の骨折を認めている。2例とも血清、尿中電解質は正常で尿路感染はみられなかつた。なお第2例に副甲状腺の機能低下を認めた。本症の結石合併は22~74%で、負の窒素平衡に関係し、osteoporosis は組織破壊促進を示す臨床表現の一つで、糖質代謝ホルモンに関係すると囃われる。

26. 骨盤骨折に合併せる尿路損傷と後遺症、とくにその処置について：百瀬俊郎、坂本公孝（九大） 最近2年間に観血的療法を施行した8例の経験を述べ、とくに受傷時の尿路管理の重要性を説いた。詳細は

「皮と泌」23巻5号を参照されたい。

27. 泌尿器科手術に於ける脊髄麻酔下の心電図について：三宅弘治（名大） 術中血圧がショック血圧（70mmHg）以下にならない限り、輸血、輸液、強心剤、昇圧剤は鋭意制限して低血圧麻酔としての利点を脊髄麻酔に發揮させ、一方ブラウン管オツシロスコップを備えた心電計にて術中の心電図の変化を観察記録集計した。大阪市大沢田外科での脊麻下に於る血圧の二相性降下に平行すると考える RR の二相性延長が殆んどに観察され、二相性ならずとも RR の延長は全例に見た。これより脊麻後3分以内に起り15分位続く RR の一時的延長（徐脈降圧反射）は腰麻ショックに関係あると考え、血圧の変化で明らかにショックを起した例以外の症例で、血圧はなめらかな下降をたどるにかかわらず、かかる一時的 RR の延長を示すものは一過性に不顕性腰麻ショック状態（ワゴトニー）を経過したと主張したい。最後に我々の手術では心促進神経は麻痺されていないことを附言する。

28. 尿路変更術に関する研究（第2報）：前川 昭、蔡衍 欽、大竹 浩、内山記世之（名大） 前回に引き続きテフロンコーチングしたテロンチューブを改良し、殊に狭窄を防ぐ為に断端を改善し、又剥離した小腸の粘膜を尿管の代用として使用しそれ等についてレ線学的な考察及び電解質代謝、腎クリアランス試験等について種々検討を試み良好な結果を得た。

29. 腎盂切石術の適応範囲について：岡 直友、塚本俊雄、加藤 董（名市大） 腎石の腎盂切石術は腎切石術より腎保存的に勝る事は周知の事とはいえ、之が適応の選定は大きな問題であらう。当教室でも腎盂切石術を過去3年来行えるもの8例（単一結石6、多発結石2）あり、この内比較的大きい結石4例の結石と腎盂との大きさの関係を計測上に於いて述べた。即ち腎盂切石には腎門部の広さ、同所の腎盂内腔の大きさが適当であるかが必要な事は勿論ではあるが、経験例はフィルム上の腎盂の径が0.6cm 以上のものであつた。切開線を適当に延長すれば腎盂壁の伸展性を利用し、且つ結石の廻転（Wendung）を適当にすれば腎門の巾が結石より遙かに狭く見える場合でも摘出可能である。

質問：酒徳治三郎（京大） 腎盂内において大結石を破壊後剔除の御経験についてうかがいたい。腎盂内にて破壊した結石片・小結石の剔除に際しては Coagulum-pyelolithotomy が行われて来たが、最近我々は酢酸ビニール樹脂を応用してその目的を達することを得たので機会をみて報告する予定である。

答：塚本俊雄（名市大） 症例川瀬に於て、結石が

珊瑚樹状を呈し一部腎盂切開面にて破砕し全摘出した。

30. 尿道直腸瘻の手術経験：森 幸夫（市立伊勢）伊東敬之，大西武司（市立伊勢，外科）前立腺膿瘍切開で生じたと思われる尿道直腸瘻に会陰式瘻孔閉鎖術を行つて失敗した33才患者の1例，及び72才で会陰式前立腺剔除術で生じ，一度会陰式閉鎖術を受けて失敗したと思われる巨大な尿道壁缺损部を有する尿道直腸瘻に対し，残在せる前立腺を恥骨後式に被膜内剔除，併発せる膀胱結石摘除，及び Young-Stone の根本手術を行い，瘻孔は完全に治癒し立位で軽度の失禁をのこした1例について述べた。

31. 興味ある経過をもつた尿路結核の2例：飯田正男（奈良医大）第1例：46才，女。抗結核剤の投与を受けたことなし。比較的長期間続いた無症候性純血尿を訴えて入院。尿中結核菌培養陰性，膀胱鏡的に右尿管口よりの純血尿排出をみたが，再三施行せる腎盂撮影術でも結核性病変所見を認めず，むしろ腎盂腫瘍を思はず像を呈した症例で右腎摘除を行つた。剔出腎盂内に血塊多量存在し，同粘膜に粟粒大結節が多数みられたが，実質内には肉眼的変化は殆んどなく，組織学的に増殖性結核であつた。第2例：44才，女。15年前，某大学病院で左腎結核の為腎摘除を受けた。以後SM，PAS，INAH等の化学療法を受け。10年前より容量数10ccの萎縮膀胱となつた。急性汎腹膜炎を発して入院，開腹により腹膜内自然膀胱穿孔を起こしていたことを知つた。穿孔部の組織学的所見では組織は一般に粗となつており，粘膜上皮も高度に菲薄化して遂に欠如しているのをみた。強度の炎症性細胞浸潤があつたが結核性変化はみられかつた。

32. 尿管逆流現症73例の統計的観察：中川清秀（国立京都）昭和30年～昭和36年7月迄の京都大学泌尿器科並びに国立京都病院にて経験した症例を73例を蒐集し2～3の点で統計的観察を行つた。症例は結核性萎縮膀胱27例，萎縮膀胱の Scheele 氏手術後6例，膀胱癌11例，神経因性膀胱9例，膀胱憩室3例，膀胱部分切除後3例，前立腺癌3例，尿道狭窄2例，尿管異所開口2例，膀胱頸部疾患，膀胱結石，慢性腎盂腎炎，マリオン氏病，膀胱後腔腫瘍，前立腺肥大症，膀胱外反症の各1例の計73例である。自験例では膀胱撮影，尿道撮影の2998枚のレ線写真を検索し73例（2.4%）に尿管の逆流を認めた。疾患別では結核性萎縮膀胱が37.5%で最も発生率が高く，次で神経因性膀胱，膀胱憩室の順であつた。尿管逆流現象の発現例では両側21例，左側34例，右側18例であるが特に有意の差があるとは考えられない。次に病変に依る分類では，生

理的逆流（小児），病的逆流に分け，病的逆流を先天性異常（膀胱外反症，マリオン氏病，尿管異所開口）と後天性器質障害に因るものと神経性機能障害に属するものとに分け得る。前者は腎，膀胱性の混合型が最も多く，結核性萎縮膀胱，膀胱癌，膀胱部分切除後，慢性膀胱炎等で，後者は神経因性膀胱が之に属す。尿管逆流現象は入院患者の3.7%に発生し診断的に役立つ事もあるが，上行性病巣の原因となり，疾患の予後に重大な影響を及ぼすので注意すべきである。

追加：黒田恭一（金沢大）膀胱尿管逆流現象の観察には延引性膀胱撮影が適し，小児の尿路感染との関係が重要視される。これによると本現象発現には時間的消長がみられ，永続型，直後型，遅発型などが区別され，尿管口部の恒久的病変以外に，腎盂炎や膀胱炎では一過性に出現する場合がしばしばあり，また排泄性膀胱撮影における尿管下部運動障害との間に関連性の認められる症例が少なくない。

33. 症例・1) 精管尿瘻，2) 膀胱癌と前立腺癌との併発：小田完五，久保泰徳，上田恵一，筏 淳二（京府医大）1) 佐竹某，50才，男。脊髄癆による完全尿閉を有し，右副睾丸炎を併発。右除辜術並に左精管結紮術施行，2週後右鼠径部に有痛性膿瘍を生じ，排膿後瘻孔より尿の湧出を見たので精管断端を再結紮し，膀胱内にカテーテルを留置することによつて尿瘻は全治した。新江某，65才，男。恥骨後前立腺剔出術並に両側精管結紮術10日後より右鼠径部術創部に発赤，腫脹，次いで瘻孔を形成し尿の湧出をみたので第一例と同様の治療方法により全治した。2) 坂某，72才，男，血尿，頻尿を訴えて来院。膀胱鏡検査にて膀胱右側壁に拇指頭大の腫瘍を認め，指診にて前立腺右葉に表面凹凸不整，固い腫瘍を触知した。膀胱腫瘍切除術並に全前立腺剔出術を実施し，組織学的に前者は膀胱の乳頭状移行上皮癌，後者は前立腺に発生した腺癌であることを確認した。

34. 膀胱周囲膿瘍の興味ある一例：加藤 董（名市大）31才女子。数ヶ月来，体温上昇（37°～38°C）下腹部痛，尿濁，月経異常が続き，約1ヶ月前附屬器炎の診断のもとに開腹術を受けたが何ら婦人科的に異常なく，引続き各種抗生物質投与を受けた。膀胱撮影では膀胱底は恥骨結合上6糎上昇し，頸部は延長し不規則な形を示した。経陰の触診で膀胱部に広汎な硬結とその一部に波動を触れた。この部に向い腹壁上より穿刺を行い膿10ccを得た。細菌検査の結果グラム陰性桿菌を証明した。しかも之は既にカナマイシン以外の抗生物質に対し感受性は認められなかつた。カナマイシンの全身的投与と穿刺後に局所注入することによ

り殆んど全治するに至らしめた。一方開腹術後気泡尿があるを訴えたので各種検査を行つたが膀胱—腸瘻を発見出来なかつた。

35. 婦人科泌尿器科疾患の 2, 3 について: 新谷 浩, 日野 豪, 喜多芳武 (関西医大) 関西医大泌尿器科に於ける最近 3 年間の女子患者数は, その間の患者総数の 39.2% となつている。臓器別に見ると, 外来患者では膀胱疾患が最も多く次いで腎疾患, 尿管疾患, 尿道疾患の順となり, 入院患者では腎疾患が最も多く, 尿管疾患, 尿道疾患の順となつている。疾患別に見ると外来患者では膀胱炎が最も多く, 腎結石, 水腎症の順となり, 入院患者では腎疾患中では腎結石, 腎結核の順となり, 尿管疾患では結石症が最も多くなつている。妊娠子宮と上部尿路との関係を妊娠後半期の 15 症例についてレ線学的に検討したところ, 全例に著明な上部尿路の拡張を認めた。特に右側は全例に認められ又著明であり, 経産婦より初産婦に著明で, 第 1 胎向より第 2 胎向に, 頭位より骨盤位に上部尿路拡張が強く現われ, 自覚症状も拡張度の高度のものに強い様であつた。

36. 興味ある精管疾患の 2 例 高田 全 (鳴和病院), 真谷川真常 (金沢大) 共に排尿障害を主訴として来院せる患者に偶然発見された症例で, 第 1 例は 67 才, 尿道膀胱レ線像にて両側精管の石灰化像を認め精囊腺は異常なく, 別出標本で副睪丸部に炎症所見を欠き精管のみに長短様々の分節を有する中腔性の石灰化がみられた。第 2 例は 59 才, 左精管の小指頭大硬結で

圧痛, 自発痛なく発病時期不明である。腫瘍は周囲との癒着軽度であり病理組織学的に Fibroadenoma と診断された。精索腫瘍は比較的稀な疾患であり中でも精管に原発せる良性上皮性腫瘍は未だその報告に接しない。

37. 造精機能抑制機転に関する研究: 酒徳治三郎, 北山太一, 姪多量令, 中川 隆 (京大) 辜丸造精機能に対して抑制的効果を有するといわれる nitrofurantoin 誘導体の投与および温熱刺激によつてひきおこされた精細管の変化を組織的に観察した。また精細管上皮由来と考えられるセミノーマに対して, これらの造精機能抑制効果を有するか否かについて実験的, 臨床的に検討を加えた。

38. 母体に男性化が見られた intersex の一例: 山口武津雄, 浜田稔夫 (大阪市大) 妊娠経過中に母体に男性化が見られ, 集簇性瘻瘻を発生し, intersex の未熟児を産した一例を報告した。

39. Turner's syndrome の 3 例: 楠 隆光, 松永武三 (阪大) 19 才, 20 才及び 13 才の女性について, 身体症状並びに各種検査成績を詳細に検討して Turner's syndrome と診断した。これら 3 例に対して, 骨髓細胞培養法及び皮膚組織培養法を応用して, 体細胞の染色体の検索を行つたが, 何れも 45 染色体を証明することが出来た。遺伝学的に染色体を算定し得たのは本邦では最初である。以上 3 例の詳細に関しては, 各種文献の考察と共に, 原著として発表予定である。